

「神の家族」

2005.5.22

赤羽聖書教会主日礼拝説教

19. こういうわけで、

あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、
今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。

20. あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。

21. この方にあつて、

組み合わされた建物の全体が成長し、
主にある聖なる宮となるのであり、

22. このキリストにあつて、

あなたがたもともに建てられ、
御霊によって神の御住まいとなるのです。

説教

今日は聖霊降臨節です。

聖霊降臨節というのは、イエスさまが復活なさってからちょうど七週間目の日曜日（ユダヤでは五旬節と言う）に、集まって神さまを礼拝していた弟子たちに主の御霊が下り、主のみからだなる教会が誕生した日です。その日、「突然、天から、激しい風が吹いてくるような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った」後、「炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどま」るや、「みな聖霊に満たされ、御霊が話させてくださる通りに、他国の言葉で話し出した」のでした（使徒 2:2-4）。かくして、「使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをして」（使徒 2:42）キリストの栄光をあらわす、キリスト教会が世に誕生することとなります。

このキリスト教会は、「真理の柱また土台」とか、「神の神殿」とか、「一切のものを一切のものによって満たす方の満ちておられる所」とか、「キリストのからだ」とか、さまざまな言い方で表現されますが、ここエペソ書 2章19節では、使徒パウロは「神の家族」と表現しています。

19. こういうわけで、

あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、
今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。

これによると、教会は、神を父とし家長とする「神の家族」です。「家族」と訳される言葉は「一つ家の中に暮らす人々」を意味します。核家族化が進んでいる今日とは異なり、肉親や親族等も含む大所帯のことですが、いずれにせよ、神を家長とする「神の家族」に正式に迎え入れられたことを意味します。もともとは「他国人」にして「寄留者」の心細いホームレスでした。「他国人」はごく一般に「外国人」のことです。税金払わなくてよい代わりに、何の保護もありません。私が韓国に留学している時には、韓国の健康

保険に入ることができませんでした。役所に聞いたら、外国人はダメだと返事で、医療費が余計にかかりました。小さな病気（風邪）ぐらいならまだしも、大きな病気をしたらどうしようと、ただ祈るばかりでした。幸い、教会に、開業医がいて、私が牧師だということで無料で（後には百円で）治療してくれました（薬までくれました）。「外国人」というのは、不安なものです。不安なもの。心細いものです。いつその国を追い出されるかわからない、一度その国に入るや一生涯「外国人」として生きなきゃならない、差別されたり、いじめられたり、虐げられたりと、希望のない者です。選挙権もない、その国の運営に関わることも許されない、アパート借りるのも容易じゃない、その国の誰かが身柄を保証する保証人となってくれなければ、アパートに住むこともできない、税金を納めることもない代わりに、何の保護も保証もない、ただその国の人々の温情にすがって生きる以外にない、それが「外国人」です。

だから、使徒パウロは、ここで、イスラエルから見て遠く異邦人の地エペソの教会の信徒たちに関して、こう表現しています。「あなたがたは、.....以前は肉に於いて異邦人でした。.....無割礼の人々と呼ばれる者であって、そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。」（エペソ 2:11-12）「寄留者」と訳されている言葉も似たり寄つたりの意味です。これはもともと「家の傍らの人」という言葉で、「外国に移り住んだ者」の意味です。ある国に住みながら、国籍も市民権もない、旅行者、居留者のことです。「外国人」と同じく、全く身分も安定も将来も保障されない、（パウロ流に言えば）「望みのない者」です。

しかし、それが「神の家族」とされました。「聖徒たちと同じ国民、神の家族」とされました。部外者だったのに、身内に迎えられました。外国人だったのに、滞在許可（ビザ）をもらいました。神さまの祝福にあずかり得ない者が、神さまの祝福を受ける者とされました。永遠の滅びに投げ入れられて然るべき者が、永遠のいのちを相続する者とされました。何ら相続地を持たぬ望みなき「外国人」「寄留者」が、「神の子」としての身分と特権を相続する者とされたのです。そして、希望を得ました。「望みなき」者が、永遠の希望を得たのです。

そして、使徒パウロは、エペソ教会の信徒たちが「神の家族」とされたのは、キリストがそうしてくださったからだ、と言います。キリストが、ご自身の「血によって、近い者と」してくださいました（13）。「キリストの中にある」者として下さいました。「神さまと和解させ」て下さいました。罪の赦しを得させて下さいました。神さまに仕える者として下さいました。神さまから隔離されていた「隔ての壁」を打ち壊して下さいました。神の律法を完全に守る者と認めて下さいました。一つも律法を守ることが出来ないのに、あたかも完全に神さまに従う者であるかのように認めて下さるのです。それは、「十字架によって」です。イエスさまが流された「十字架の血」によって、私たちの罪を贖い、神さまと和解させ、罪の赦しを得させ、神と人にと仕える「平和」をもたらして下さいました。17節を見ると、「キリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べられ」とあるように、復活のキリストは、イスラエルからは遠い異国エペソの地にまで、使徒たちの宣教を通して福音を宣べ伝えさせて、エペソに住む兄弟姉妹たちまでもが、イエスさまを信じて永遠のいのちを得、神と人とを愛する平和にあずかったことが記されます。

つまり、使徒パウロが言うように、キリストが、救いをもたらして下さいました。平和をもたらして下さいました。「キリストこそ私たちの平和」です（2：14）。私たちは、自分の罪の中に死んでいたのに、この世の悪魔の言いなりに歩み、自分の欲のまま、欲の赴くままに、自分勝手に生きていたのに、神さまの怒りとさばきを受け、永遠の滅びに投げ入れられて当然な者であったのに、父なる神さまは、私たちを愛するその大きな愛によって、罪に死んでいた私たちを「キリストと共に生かし」、「キリストに於いて、共によみがえらせ」、「キリストと共に、天の座に座らせてくださった」のです。私たちを神の契約に入れて、神の家に迎えて下さいました。神の家族にしてくださいました。神の子にして、永遠のいのちを相続する者として下さいました。すべて、キリストによります。キリストの恵みによることです。キリスト抜きで、私たちが「神の家族」に迎え入れられることはありません

でした。私たちは、キリストにつながれ、キリストと共に生かされて、キリストによって、救われたのです。罪の滅びから、罪の呪いから、神の怒りとさばきから、キリストによって、救い出されました。神の家族は、このキリストの血によって、罪を贖われ、平和を得ているのです。キリストが十字架で流された血がなければ、神さまとの和解も平和もありませんでした。キリストの十字架の血が、神の家族にいのちをもたらし、平和をもたらすのです。

人類の歴史を紐解けば、最初、神さまは、最初の人間とその家庭を祝福なさいました。しかし、人が神さまに背いた時、その家庭も同時に墮落します。神さまに逆らうようになります。このため、人も家庭もエデンの園を追われます。「エデン」とは、「喜び・楽しみ」という意味です。人は、喜びに満ちた生活を追われ、神と共にある楽しい楽園での生活から追放されてしまいます。このため、そのままでは神さまの祝福を受けることができず、自分の罪の故に神さまに呪われます。家庭からは、喜びが失われました。平和も失われました。

女には、「産みの苦しみを大いに増す」と、神さまがさばきを宣告なさいます。「あなたは夫を恋い慕うが、夫はあなたを支配するであろう」と、夫婦関係への呪いが宣告されます。

男には、「土地が...のろわれ、あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。土地はあなたに向かっていばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べ、あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」と、人が、常に死の影に怯えながら死の糧を食らい、死ぬために汗水流して必死に労苦して、最後は予定通りに死んで塵と化す、という、まことに「空の空、すべては空」、ただただ「空しい」としか言いようのない、呪われた生活に服することが宣告されます。人が、神に背いて生き始めた時から、夫婦の関係は神さまに呪われ、男も女も、すべて空しく死に向かって、すなわち死ぬために空しく汗水流して必死に労苦して、そうして最後は死んでしまうという、まことにこの上なく空しい家庭生活へと落ちぶれ果ててしまったのです。

聖書に出てくる女性の中で、リツパという女性がいます。その女性は、おそらくその類まれなる美貌の故に、サウル王に見そめられてそばめのひとりになります。しかし、そのサウル王は、一時は隆盛を誇るものの、やがて気が狂い、戦死して、その息子イシュボシェテが跡を継ぎます。その時將軍であったアブネルという男は、このイシュボシェテをもちたててあげますが、どんどん傲慢になっていき、亡きサウル王のそばめであるリツパに手を出します。このことでイシュボシェテはアブネルを責め立てますが、逆にアブネルの反感を買って、アブネルはダビデの側につきます。それから間もなくイシュボシェテは部下に暗殺されてしまい、イスラエル全土はダビデの支配下に下ります。しかし、それから三年後に飢饉があった時、ダビデが神託を伺うと、サウル王がギブオン人を殺したことの血に報いよとのお告げがあり、結局、サウルの子孫七名をギブオン人に引き渡して復讐させたのです。この七名のサウルの子孫は殺されて野ざらしにされましたが、リツパは自分の息子の遺体を「昼は鳥に食われぬよう、夜は獣に食われぬよう」じいっと番をしていた、というのです。

まことに哀れな話です。彼女は、ただその美貌の故に、サウルの妾にされ、部下のアブネルに辱められ、自分の二人の息子がようやく成人して頼りになると思った時に、これを取り上げられて、目の前で殺される、彼女はただ泣きながら自分の息子の死体をついばもうと集まって来る鳥を追い払い、獣を追い払うしかないのです。手にした権力に気が狂って死んでいったサウル王も惨めですが、男たちに翻弄されながら呪われた生涯を送らねばならなかったリツパもまことに哀れです。

しかし、この世には、私たちの周りには、これと似たような、哀れな、悲惨な状況は、いくらでもあるのではないのでしょうか。新約聖書にも、サマリヤの女の話や、マグダラのマリヤ、姦淫の現場で捕まった女の話など、挙げればきりがありません。キリストを抜きにしては、たとえ愛し合っている男女であっても互いに傷つけ合います。むしろ、なまじ愛情があればあるほど、女は女で、男は

男で、互いに支配しようとする欲が邪魔をして、つまり罪が邪魔をして、傷つけ合うことになります。「愛は死のように強く、ねたみはよみのように激しい... その炎は火の炎、凄まじい炎です。」(雅歌 8:6)とあります。

互いへの愛情故にますますわがままに相手を支配しようとするのか、それとも相手に仕えようとするのか、それは大きな分岐点です。愛すれば愛するほど傷つける、しかも取り返しがつかなくなる、罪深い私たちが、罪の悔い改めなしに、どんなに人のことを思い、人のために尽くし、人を愛しても、そのままでは、むしろやればやるほど、自分の知らないうちに、どんどん自分中心になっていって、無意識に相手を支配しようとして、自分も傷つき、人も傷つけ、気がついたら相手を殺していたということは、よくあるのです。

だから、私たちは、キリストを抜きにしては何一つ実を結びません。喜びも平和もありません。それは、私たち個人の生活もそうですし、私たち各々の家庭もそうです。私たちがキリストの血によって罪を贖われてこそ、私たちに平和が訪れます。キリストによる救いがなければ、「私たちが家を建てるのは空しい」のです。「早く起きるのも、遅く休むのも、辛苦の糧を食べることも空しい」のです。夫も、妻も、その子どもも、神さまに呪われてその一生涯自らの罪を思い知らされることとなります。「義人なし。一人だになし。」とありますが、家庭も同様です。最初の家庭の墮落以来、正しい家庭はひとつもなく、そのままでは神さまの祝福を受けるに足る家庭などこの世にひとつも存在しなくなりました。

ここにキリスト教会がこの世に存在する意義があります。このような罪に呪われた人間の家庭しか存在しない世にキリスト教会が誕生しました。それは「神の家族」です。それは、言うなれば、人類の墮落以前の、本来の人間の家庭の姿です。神さまが共におられます。神さまがそこに住まわれます。(19節では「神の家族」で、21節では「聖なる神の宮・神殿」に例えられていますが、いずれにせよ共通するのは、「神の御住まいとなる」ということです。)そこでは、父なる神が家の主人です。そして、御子キリストの血によって罪が贖われました。人々は神をあがめます。みことをばが教えられ、御意志を行います。罪贖われた喜びと感謝が満ちあふれます。神と人を愛する平和が支配して、神の栄光が光り輝いています。これが本来の家庭です。家庭はすばらしい、家庭は本来良いものだといってお話ししましたが、しかしそれはあくまでももとの本来の家庭がそうなのであって、現状は、現実は、罪の故にうまくいきません。すべての家庭は、呪われています。キリスト抜きでは、呪われています。罪の故に、神さまに呪われています。だから、うまくいかないのです。

しかし、父なる神さまは、そのような罪深い私たちを見捨てることなく、むしろ憐れんで、教会を与えてくださいました。教会こそは「神の家族」です。真の家族です。最高の家族です。永遠の家族です。ここに家庭の理想があります。目標があります。教会こそは、本来の家庭です。すばらしかった、「良かった」初めの家庭の姿があります。そして、罪に墮落した家庭が回復した、理想の姿があるのです。この「神の家族」なる教会は、全世界に満ちる罪に呪われた家庭の、祝福の基となります。

もしも世界に満ちる各家庭の祝福があるとしたら、それは教会のように、キリストによってはじめて可能です。家が、神を恐れ、神をあがめて、神に従う、家の教会となる以外に祝福はありません。そして、そのようになるべく、みなさんが喜びと感謝をもって家族に奉仕する以外にありません。そうでなければ、呪い以外のなにものもありません。

ここに集うみなさんひとりひとりが、教会こそ「神の家族」、真の家族の理想の姿であることを肝に銘じ、ここに神が住まわれる、神が共におられ、神が主人として家を治めたもう、私たちは、御子イエスの血により罪贖われ、永遠のいのちをいただき、神の子としていただいた喜びと感謝をもって、神をあがめ、神と人とを愛して、神の栄光をあらわす良き「神の家族」なる教会を建て上げ、これを良き模範として、良き家庭を築いていかれるよう主の御名により祈ります。